

第1分散会

ファシリテーター 柴崎 あい

分散会記録者 手塚 駿

社会による子育てを目指した居場所運営

一般社団法人ソーシャルペダゴジーネット 発表者 松田 考・辻 幸志

一般社団法人ソーシャルペダゴジーネットは、ユースワークを通じて、すべての子ども・若者の権利を保障する活動を展開している。活動のルーツは戦後の勤労青少年ホームにあり、働く若者の憩いの場提供と、現代の貧困や困難を抱える若者への専門的な支援を統合したものがユースワークである。

私たちの目的は、家庭や学校などの既存の枠組みから孤立しがちな子ども・若者のために、社会の中にサードプレイス（第三の居場所）を創出すること。ヤングケアラーや経済的困難など、様々な背景を持つ若者が安心して過ごせる空間が必要である。

ユースワーカーは、このサードプレイスで「遊ぶ、つなぐ、見守る、支援する」役割を担っている。単なる指導ではなく、優しく見守るコーチングを通じて、本人の声に耳を傾け、彼らにとっての「意味ある他者」であり続ける。

具体的な実践として、宇部市では大学生ユースワーカーが、学習支援や交流イベント（たこ焼きパーティーなど）を通じて、期待で繋がる居場所を運営している。私たちは、これらの活動を通じて、若者の主体的な成長を促し、社会的な孤立を防ぐユースワークのモデルをさらに広げていく。

あなたにとっての「投資」って？を探求！

FC 今治高等学校里山校投資同好会 発表者 菊地 春海・河西 航大

私たち FC 今治高等学校里山校投資部は、「ノーリスクで投資を行い、多様な意見が実践につながる場をつくる」ことを目的に掲げ、「投資への食わず嫌いをなくし、『投資とは何か』という自分なりの最適解を見つける」ことをビジョンとして活動している。

設立から1年目の私たちは、目的・ビジョン・目標が明確でなかったため、ほとんど活動できない状況に直面した。一時は活動を続けるべきか迷ったが、新たな仲間と議論を重ねた結果、目的・ビジョン・目標を改めて明確化し、もう一度前に進むことができた。

現代社会には、お金を生み出すことを中心とした「資本主義」と、お金では得られない「共感」や「つながり」を資本とする「共感資本」という、2つの大きな価値軸が存在する。私たちは、この価値軸を考えることは、自分の生き方を考えることそのものだと捉えている。そして、その軸（「資本主義」と「共感資本」）と向き合う場として、投資部が存在したいと考えている。

今後も活動をさらに深め、学びを広げていきたい。



愛南の地域と人を繋ぎ、新しいをうみだす

一般社団法人 Umidas 発表者 関根 麻里

東日本大震災をきっかけにした宮城県南三陸町でのボランティア活動で、地域が交流を通じて活気付く様子を肌で感じた。この体験から地域活動への関心を深め、その後、愛媛県愛南町へと移住した。現場で一次産業に携わる人々の姿を見たことで、その魅力に惹かれ、東京では実現できなかった地域に根ざした活動を愛南町で展開している。



愛南町は美しい海に囲まれた自然豊かな町であり、ここでは新鮮なカツオの刺身など、豊かな海の幸が味わえる。この愛南町の素晴らしい「資源＝魅力」をどうしたら町外、そして町内の人々に伝え、3年前から活かせるか議論を続け、今年3月に「Umidas（ウミダス）」という団体を町民と共に発足させた。

Umidas は、町民と役場をつなぐ中間支援組織として機能している。繋ぐと稼ぐという2つの軸を両輪として①町の中や外を繋ぐ②役場の仕組みだけでは収益化が難しかった稼ぐという活動を、Umidas が支援することで事業として確立し、地域にお金を回す仕組みを生み出している。

参加者からの声

【質疑応答】

<社会による子育てを目指した居場所運営>

Q 人はどのようにして集められているか。

A 声をかけてつながっていく中で集めていく。

Q タブレットを持参してそのみに傾倒していることをどう思うか。

A ピアグループによる共同活動や空間づくりの方が、引き付ける力を持っていると思う。

Q 目的のない中だと秩序は保たれないのでは？強者が弱者へ中傷するような発言に対しては？

A 秩序はよく課題になる。最低限のルールにとどめている。未然防止よりも、対処プロセスを考え、共有していく。

<あなたにとっての「投資」って？を探求！>

Q 投資部に入りたいと思った理由は何か？

A 最初はお金を稼ぐイメージが先行していたが、実際には、生き方を考えるようになった。

Q アルバイトをして、目の前をまず見ていくことから始めてほしい。

Q 大学生から見ても、新しい考え方・恵まれた環境で活動できて羨ましく感じる。若々しい力を感じる

Q 「投資部」という言葉から想像していた内容ではなかった。投資を考えるとところから、経済や労働、生き方について考えたり仲間と語りあったりしているのは貴重な学びだと思う。

<愛南の地域と人を繋ぎ、新しいをうみだす>

Q 仕事とプライベートの境目をどうつけていけるのか。

A つながりが増えており、好きなことができている分、幸福度は高い。5つの仕事どうしもつながっていて、それぞれを充実させることができている。

Q 知ってもらう・広げていく方法は。

A 通常の宣伝以外にも、子どもが体験して、家族に「良かったよ」と伝えてくれると嬉しい。

第2分散会

ファシリテーター 武智 理恵
分散会記録者 宇都宮愛樹

まちにたくさんの主人公を！

NPO 法人アクションポート横浜 発表者 高城芳之・藤島美聡・中山智萌

アクションポート横浜は、若者が地域とつながり成長できる機会を創出する NPO 法人である。人口約 378 万人の横浜市は多様性が大きく、人口の入れ替わりも多いため地域課題が見えにくいという背景がある。同法人は、若者が地域で活躍できる場をつくり、まちの魅力を次世代へつなぐこと、そして大学・企業・行政・NPO をつなぐ「市民参加の接着剤」として機能することを重視している。若者を手段化せず、関係構築や相互理解を通して主体的にまちづくりへ参画できる仕組みづくりを行っている。



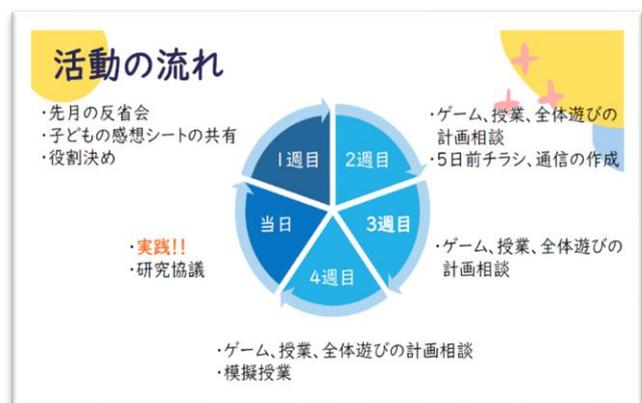
主な事業として、8 大学と提携した NPO インターンシップを継続的に実施している。学生は短期 80 時間から長期半年の活動に参加し、地域の方との交流や団体の課題解決を経験することで成長している。横浜アクションアワードでは、学生の取組を社会に広く紹介し、卒業生が戻ってくる場にもなっている。また、若者と地域をつなぐための「きっかけ作り」と、それを受け止めるコーディネーターの養成にも力を入れている。さらにヤマト繋がるプロジェクトなど、ジャンルを超えた多様な連携事業を展開し、横浜のまちに若者の活気とワクワクするエネルギーを広げている。

久米わくわくチャレンジサタデー

久米わくわくチャレンジサタデー 発表者 山極宙輝・矢富綾乃

久米わくわくチャレンジサタデーは、学生の学びの場と子どもの居場所づくりを兼ねた取り組みとして 2005 年に始まった、久米小学校・愛媛大学・地域が連携する教育実践プログラムである。

月 1 回、大学生が主体となって授業を企画し、子どもの“やりたい”と学生自身の専門性を掛け合わせながら、楽しみながら学べる活動を展開している。授業づくりは 1 か月かけて準備し、教材研究、指導案作成、模擬授業など学校現場さながらのプロセスを踏む。活動後には現職教員や OB・OG から直接助言を受けられる点が最大の学びであり、専門外の教科にも挑戦できることが学生の成長につながっている。子どもの感想は素直で率直で、授業改善の重要な指標となっている。今後の課題として、



活動後には現職教員や OB・OG から直接助言を受けられる点が最大の学びであり、専門外の教科にも挑戦できることが学生の成長につながっている。子どもの感想は素直で率直で、授業改善の重要な指標となっている。今後の課題として、

学生個々のスキルアップ、学年ごとの役割整理、チームとしての協働体制強化が挙げられ、地域・学校・大学が協働してより良い学びの場づくりを追求している。

地域教育を事業にするには

一般社団法人みんなのまなびや 発表者 雫石まどか

上島町では、町内唯一の弓削高校が入学者減少により廃校の危機に直面し、公営塾の設置や全国募集、教育寮の整備などが進められた。雫石氏は地域おこし協力隊として公営塾に勤務し、学習支援とあわせて学校と地域をつなぐ活動に取り組んだ。

協力隊としての3年間では、行政職員が多忙さを理解しながら「行政のニーズを汲む」こと、よそから来た立場だからこそ「地域のニーズに気づく」こと、そして動く時期や方法を見極める「風を読む」ことを学んだ。こうした気づきにより、行政や学校だけでは支えきれない部分を補う役割が必要だと感じたことが、起業を決める大きなきっかけとなった。

活動は、公営塾での指導や地域イベントへの高校生の参加支援、マルシェでの交流企画、選挙を学ぶ会、先輩座談会、小中学校での出前授業など多岐にわたり、地域と学校の往来を生み出す働きかけを続けた。一方で、教育の仕事は収入につながりにくく、協力隊が任期後も地域に関わり続けるための受け皿が少ない課題も明らかとなった。

こうした背景から、雫石氏は「みんなのまなびや」を設立し、高校魅力化の支援、協力隊の研修・相談、移住定住の支援などを通して、地域教育を長く支える仕組みづくりに取り組んでいる。

教育系協力隊の入り込むスキマ

- 協力隊を3年やったからこそ分かること
 - 行政のニーズを汲む
 - 基本的に行政職員は忙しい！
 - 肩の荷を下ろしたい つまり、外に仕事を出したがっている
 - 完全縦社会 つまり、経験年数・信頼度・他者からの評判を気にする
 - 地域のニーズを汲む
 - 協力隊員はもともと地域にいなかった人材
 - 地の人が気づかないところに気づけるはず
 - 風を読む
 - お金をどこからひっぱれるか
 - 意思決定者とどのようにコミュニケーションをとるか

一般社団法人みんなのまなびや

参加者からの声

【質疑応答】

■NPO法人アクションポート横浜

Q 大学生の就活が早期化しているが、現在の活動状況はどうなっているのか。

A 就活中の学生でも、地域に思い入れのある学生は、就活と両立しながら活動を継続している。

■久米わくわくチャレンジサタデー

Q 子どもがやりたいことと学生がしたいことが違う場合、どのように対応しているのか。

A 年間7回の活動の中で、基本的には子どもがやりたいことを中心に実施しているが、学生が企画したいことも取り入れ、双方の思いをバランスよく反映している。

■一般社団法人みんなのまなびや

Q 弓削高校の魅了化の先はどのように考えているか。

A 入学後、転校する生徒が毎年いる。3年間弓削高校に通って卒業するような魅力化をしたい。

【全体を通しての意見感想等】

○ 若い方の意欲を感じ、未来は明るいと思った。

○ 関係団体が win win になる関係作りが重要と感じた。

○ 大学生がいない地方部においても学生の力を借りたい。そのための仕組みづくりが必要。

第3分散会

ファシリテーター 西川 浩司
分散会記録者 山木 美里

久万高原町の地域創生活動

Core-KUMA 発表者 小田 哲志

「2 学期を迎える子どもたちを勇気づけたい」という思いから始まった黑板アートは、地元出身の画家・伊東氏を中心に、学生や地域の住民、芸術家、教員等の力を借りて実施しているプロジェクトである。春先から協力してくれるボランティアを募り、夏休み最終週に学校の黑板へそれぞれの作品を描き、サプライズで子どもたちに披露している。作品鑑賞を楽しんだ後には、子どもたち自身がその作品を「消す」ことで、新学期へのスイッチを入れる。



子どもたちだけでなく、ボランティアとして参加している学生や、地域住民、地元アーティスト、教員などにとっても、達成感や地域貢献への意欲を増幅させる取組みとなっている。ボランティア作家の募集や、作品制作にかかるコスト、学校と作家の日程調整、サプライズであるが故の鑑賞機会の制限など課題もあるが、「地域教育が日本を救う」と信じて活動していきたい。

Green Expo をマイルストーンに横浜市の未来を創る

ヨコハマゼロワン 発表者 青木 祐弥

2027 年に神奈川県で開催される国際園芸博覧会 (Green Expo) を契機に、「循環型社会の実現」をテーマとして、若者の手で横浜の未来を考えていくプロジェクトチーム「ヨコハマゼロワン」が発足した。運営は中学生から大学生を中心とした若者が担っており、横浜市や大人チームの力も借りながら少しずつ動き出している。



チーム発足のきっかけは、市主催のワークショップであり、当初は多くの若者が参画してくれたが、その後は活動の方向性がなかなか定まらず、停滞期が続いた。それでも中心メンバーで試行錯誤をしながら、食事会を企画したり、改めて作戦会議を開いて役割分担を明確にしたりするなど、学生発のプロジェクトが地域に還元されていくことを目指して歩みを進めている。2027 年の国際園芸博覧会における企画立案を最初のゴールとしつつ、そこでの活動がチームの最終目的とならないよう、先を見据えた活動に挑戦していきたい。

南予最大級の小学校児童に最大級の体験を届けたい。

宇和地域づくり活動センター 発表者 玉ノ里 純平

西予市では、令和5年度より従来の公民館を「地域づくり活動センター」と改称し、行政窓口機能も兼ね備えたまちづくりの拠点として整備している。

その中でも、市役所に隣接する宇和地域づくり活動センターでは、南予最大級の宇和町小学校の児童を対象に、1年を通して様々な青少年活動を展開している。

夏には、地域の納涼祭で踊る「宇和町音頭」を受け継いでいく「盆踊り広め隊」事業を実施、また、25回目の開催となった秋の通学合宿「つばめ村」では、4泊5日の行程で親元を離れ、子どもたちだけで料理、洗濯、掃除をしながら学校に通う体験もした。

学校との連携の難しさや、参加者の減少・固定化等の課題もあるが、内容の充実化、実施時期の適正化、広報の強化等を通して、今後も子どもたちが豊かな学びに触れることができる環境を提供していきたい。



参加者からの声

【質疑応答】

- Q 活動を進めていくにあたり、広報関係はどんな媒体が効果的だと思うか。
- A SNS（インスタグラム）に力を入れて広報を行うことが多い。ある児童館では、インスタグラムを始めたことにより、チラシのみの広報と比べて参加者が倍増したケースもあった。
- A 参加者を多く集めたい場合は、前年度参加者や、その保護者の口コミも効果的。子ども同士や保護者同士のコミュニティを上手く活用できるとよいのでは。
- A 教育熱心な保護者はどんな媒体も見ることがある。ターゲットを絞って、キーパーソンとなる保護者の方の協力を得るのも一つ。
- A 予算が確保できる場合は、メタ広告を活用するのもあり。1,000円単位から打つことが可能で、細かいペルソナ設定もできるので効果的。

【全体を通しての意見感想等】

- いろんな地域、いろんな世代の方と関われる機会が貴重で参加した。
- 活動のヒントが欲しくて参加した。自分たちの力で活動のゴールを探していきたいと思ったときに、さまざまな意見が聞ける場があってよかった。
- 分散会ももちろんだが、2次会の雰囲気がとても好き。みなさんが同じ熱量で、この場でしか共有できないことを語れるのがいい。
- 初めて参加した。地域と高校生が繋がれる取組みについて、いろいろと試してみたい。

第4分散会

ファシリテーター 森脇 和夫
分散会記録者 高田 容弘

ボランティアをきっかけにまちづくり活動へ

あおばコミュニティ・テラス 発表者 佐野 碧・石川 南

あおばコミュニティ・テラスは、横浜市青葉区にある青少年の地域活動拠点で、学校や家庭とは異なるサードプレイス・居場所として、個人でもグループでも自由に利用できる。居場所として集う、まちづくりやボランティア活動としてプログラムに参加する、運営に参画する、自ら企画を立ち上げ実行するという活動があり、その中で多様な世代や立場の人との交流が生まれている。具体的には、「あおばユーストライ」や「あおば未来プロジェクト」などの活動を通して地域課題に関わることができる。「あおば未来プロジェクト」は一年単位で中高生が主体となり、大学生が支える形で地域課題の発見から調査、企画、提案までを行う。受動的なボランティアとは異なり、自ら課題を見つけ解決策を考える主体性や積極性が求められる。現在、青葉区民の青葉区への興味・関心を高めることをテーマに「青葉区ラブ」の活動を進めている。活動を通して、意見を伝える力、他者の声を聴く力、視点を変えて物事を見る力が身に付いてきた。今後、年度末の区長への政策提言を通して、青葉区への愛着と関心を高めていくことを目指している。

青葉区ラブの動き	活動のテーマ: 青葉区民の青葉区への興味・関心を高める
	青葉区ラブの課題意識
	活動の中心:話し合い
	区民まつりにおける活動:アンケート
	区民まつりの成果:50人ほどの人にアンケートを答えてもらった。
	

双海の子どもは双海で育てる子ども教室

双海地区公民館 発表者 奥村 宗明

伊予市双海町では「双海の子どもは、双海で育てる」を合言葉に、20年以上にわたり地域資源を活かした体験活動を続けている。中心となる「双海こども教室」では、年間を通じた農作業や防災キャンプ、伝統漁法体験を行う「ふるさと体験塾」や、外部講師による「おもしろ大作戦」などを展開している。特に注力しているのが、4～6年生を対象とした6泊7日の通学合宿「わく

双海町子ども教室
③ わくわく生活体験夕焼け村
わくわく ときどき じーん の7日間


わくわく生活体験夕焼け村」だ。参加者は家族と離れ、大学生やボランティアの支援を受けながら、食事作りや洗濯といった身の回りのことをすべて自力で行う。地域住民との交流や夜の学習、親からの手紙を通じ、子どもたちは自立心と感謝の念を育む。活動の根底には、驚きや期待（わくわく）、緊張や挑戦（ときどき）だけでなく、人の温かさや親の愛情に触れる感動（じーん）が必要だという考えがある。この「じーん」こそが子どもの心に深く響き、成長の糧となる。双海町はこれからも、大学生やジュニアリーダー、地域住民が一体となって、子どもたちがふるさと双海を愛し誇りに思い、感謝の心を持てるような場をつくり続けていく。

婦人会を再結成。地域活動に励む楽しい場に老若男女が集まる。

立花地区睡蓮会 発表者 砂田 ひとみ

高齢化と担い手不足により解散した今治市の婦人会は、2年前、名称を「睡蓮会」に改め再結成した。当初20名だった会員は、30代から80代までの多種多様な職種やライフスタイルの男女27名に拡大。会員の子どもの「睡蓮会ジュニアクラブ」も立ち上げた。背景には、今治市連合婦人会会長との出会いや、解散による地域行事への支障を危惧する声があった。活動はLINEを活用した柔軟な連携が特徴で、補助金を活用しつつバザー収益で運営費を賄っている。具体的な活動は多岐にわたり、10年続く「親子どんどん食堂」や、子ども主体の「ハロウィンパーティー」、専門資格を活かした「防災キャンプ」「手話教室」「野菜パーティー」など、単なる伝統の継承に留まらない現代的な学びと交流の場を創出している。睡蓮会は、個々が活躍する「人材バンク」のような役割を果たし、不登校の子も参加できる包摂的な地域コミュニティとなっている。「無理をせず、自分らしく活躍できる場作り」を掲げ、女性をまとめる要としてだけでなく、多世代・多分野が繋がる新しい地域貢献のモデルとして活動を続けている。



参加者からの声

【質疑応答】

Q プレイヤー（中高生）とサポーター（大学生）のバランスで意識していることは？

A 中高生が自分で考えられるように「言い過ぎないこと」を意識している。ただ、中高生を尊重しようとするあまり、自分の考えを伝えられず「守りすぎてしまった」という反省もある。状況を見極めながら、自分の意見を伝える「タイミング」を大切にしている。

Q 地域のつながりや協力はどのようにして築いてきたのか？また、長く活動を続けるために意識していることは何？

A 地域の方々とのつながりを大切に、そのつながり、つながり、つながりでどんどん広くなって続けている。若松さんが地域での顔が広く、全国的なつながりも持っていることも大きい。

Q 親子で参加するイベントを大切にしているポイントは何か？

A 募集は親子参加を基本にしているが、子どもだけの参加も歓迎。特に低学年の子どもは親も一緒に参加してもらい、体験を共有できるようにしている。スタッフが少ないため、親も手伝ってもらうことで子どもたちも安心して参加でき、次回以降はスタッフとしても参加してもらいたいという思惑もある。

【全体を通しての意見感想等】

- 活動を広めるには、楽しさを本当に感じている子たちに広げさせるというのがすごいキーワードだと思った。
- 地域の子育て中のお母さんに寄り添い、子育て支援を行うボランティア団体を立ち上げた。様々な地域資源とつなげていくことができるようにしていきたい。
- 大学生スタッフとして、活動を計画し実践していくなかで、失敗して迷惑をかけたが、見捨てずに、信じて見守ってくれる環境があるからこそ、続けていくことができている。

第5分散会

ファシリテーター 浅山 莉奈

分散会記録者 矢儀田 雅幸

ない×3 ～つやまキャンプのない事例～

津山「体験の風」実行委員会 発表者 小椋 聖也

「津山体験の風実行委員会」が主催する「津山キャンプ」は、あえて「プログラムを持たない」という独自の教育方針を掲げている。サバイバル編では、極寒の時期に電気やガスのない環境で過ごし、調理や食器の作成、時間の使い方のすべてを子供たちの判断に委ねる。学校や家庭のような過度な規制を排除し、自由な挑戦を促すことで、困難を乗り越える達成感や「生きる力」を育むことが目的である。



また、不登校支援としての「夢探し日程」も実施しており、学校に行けない子供たちに外の世界での交流と安心できる居場所を提供している。活動開始から7年が経過し、かつての参加者が大学生や高校生スタッフとして戻ってくるという循環も生まれている。参加費を抑え、誰もが参加しやすい環境を整えることで、地域に根差した体験活動を継続している。子供たちの「やりたい」という自発的な意欲を尊重することが、教育の本質的な成長に繋がっている。

CS啓発事業と地域の学び舎事業

コムスクえひめ八幡浜支部 発表者 寺坂 俊一

一般社団法人コムスクえひめ八幡浜支部は、コミュニティスクール（CS）の推進と未来を創る人材育成を柱に活動している。主力事業である「地域の学び舎事業」では、少人数の学校では単独実施が困難な漢字能力検定を、教員OBが試験監督を務めることで実現した。この取組により、子供たちは高い合格率を達成し、協会から表彰を受ける成果を上げている。また、ドローン講座では操作技術やプログラミングを教えるだけでなく、閉校記念の空撮や、高校生による防災活用の研究も展開している。



都会との教育格差の解消や教員の負担軽減を目指し、地域のシニア世代が専門知識を活かして子供たちを支える体制を構築している。学校と地域が対等なパートナーとして連携し、地域全体で子供を育む責任を共有することで、持続可能な教育支援の形を模索し続けている。活動の様子は週に一度の通信でも発信され、地域内外へ啓発活動を広げている。

編み物を通して対話が生まれる多世代交流

公民家サークル毛糸の会 発表者 小椋 さやか

「毛糸の会」は、編み物を通じて多世代が交流している。90歳の高齢者から10代の学生までが参加し、指編みなどの作業をしながら対話を深めている。趣味の場を超え、戦争体験の継承や地域課題の共有といった社会的な役割を果たしている。自然と「顔の見える関係」が構築されており、不登校傾向にあった若者が地域の一員として迎え入れられ、災害時の助け合いを約束する姿は、コミュニティ形成の重要性を示している。



科学的にも編み物は精神的な安定（アルファ波の発生）をもたらすとされており、参加者はリラックスした状態で交流を楽しんでいる。月3回の定期開催により、孤独の解消や健康寿命の延伸にも寄与しており、既存の枠組みにとらわれない柔軟な居場所づくりが、50回を超える活動継続の鍵となっている。

【質疑応答】

< ない×3 ～つやまキャンプのない事例～ >

Q 不登校支援事業としての「夢探し日程」は、どのような役割を果たしているか。

A 学校外での交流の場を提供し、参加者同士や保護者が「また次も会おう」と約束できる安心なコミュニティとなっている。

< CS啓発事業と地域の学び舎事業 >

Q 活動を推進する上で直面している地域構造の課題は何か。

A 都市部と異なり大学生の確保が難しく、活動の担い手の多くが60歳以上のシニア層であり、若者の不足が構造的な課題である。

【質疑応答】

< 編み物を通して対話が生まれる多世代交流 >

Q 戦争体験や地域情報の共有には、どのようなものがあるか。

A 朝ドラなどを契機に語られる空襲の記憶の継承や、移動支援・句会などの身近な地域情報の交換が行われている。

< 全体を通しての意見感想等 >

Q 自分の励みにもなるので、皆さんのモチベーションを聞かせてほしい。

A 驚くような発想を持つ人々に出会い、失敗さえも笑い話にできる温かい関係性。

A 準備のしんどさを乗り越えた本番で、参加者の喜ぶ「景色」を見た時の深いやりがい。

A 災害時などでも自律して生き抜ける人間を育てているという、社会的な貢献の実感。

第6分散会

ファシリテーター 伊吹 剛
分散会記録者 幸島 恭輔

おのみち100km徒歩の旅

NPO おのみち寺子屋 発表者 木山 弥優・小北 みなみ

NPOおのみち寺子屋は、広島県尾道市向島を活動拠点とし、主に広島県内の大学生59名と高校生4名、社会人スタッフで活動している。事業趣旨として、青少年健全育成（体験学習）、生涯学習「やりがい・生きがいの創造」、市民参加の「ひとつづくり」、地域コミュニティの活性化の4点を掲げている。心身の健康と体力（基盤）の上に、他人を思いやる心や課題解決能力を含む「生きる力」を育むことを大切にしている。

メイン事業は、小学4年生から6年生が4泊5日をかけて尾道市内100kmを歩き抜く「おのみち100km徒歩の旅」である。この大変な実体験を通し、子どもたちに少しでも「生きる力」を宿してもらいたい。5日間の教育目標は順に「出会い」「挑戦」「忍耐」「感謝」「感動」と設定され、学生スタッフは係に分かれてサポートを行う。

この経験により、子どもたちは「当たり前がありがたい」ことに気づき、感謝の気持ちや挑戦することの大切さを学んでいる。また、保護者には5つの公式行事への参加を条件とすることで、家庭での教育力向上を目的としている。学生スタッフ自身も、責任感や多くの学び、気づきを得る機会となっている。さらに、本事業は地域住民による資金や物品の協賛、道の整備、沿道での応援など、地域の強い協力によって開催が成り立っている。



参加者からの声

【質疑応答】

Q どの地域の子どもの対象にしているのか。どのような方法で応募しているのか。

A 尾道市外からも募集している。5月初旬に尾道市の小学校に募集のチラシ、要項を持参してお渡ししている。

Q 参加したくても参加できない児童がいるのではないのか。

A 参加費2万6千円はかなり高額。参加したくてもできていない家庭はあるかもしれない。

Q 本番に熱意が絶えそうになったときにはどのようにお互いに声を掛けているのか。

A 研修期間の中で深い関係を築き、本音で話せるような関係になっている。その関係を生かして本音でぶつかったり、励まし合ったりしながらやり抜いている。

Q ルートは毎年同じなのか。

A 毎年少しずつルートは変わっている。今年は昨年使わせていただいた宿泊地が使えなくなってルートを変更した。尾道の魅力を感じてもらえるルートを設定している。

【発表についての感想】

○昨年事前研修会に参加させていただき、子どもたちへの熱い気持ちを持っていることを感じた。

○活動中だけでなく、事前や事後の見えないところでかなりの労力があること、裏方でたくさんの方が動いていることも子どもに伝えられるとよい。

在来作物を Re：デザインして未来へ継承！

愛媛県立上浮穴高等学校 くまもるず 発表者 渡邊 瑛太・橋口 清花

愛媛県立上浮穴高等学校森林環境科の「くまもるず」は、久万高原町の幻の地域資源、地大豆（久万大豆）と地雑穀を未来へ繋ぐためのプロジェクトを推進している。かつて愛媛県の奨励品種だった久万大豆は、栽培が減少し再び失われる危機にあったため、農業指導班の依頼を受け、資源の「継承」「開発」「普及」を三本柱として活動している。



栽培継承では、地域農家と連携して種子と栽培方法を受け継ぎ、猛暑下でも収穫に成功した。これまでに一万粒以上の種子を配布しており、「くまもるず」は地域のシードバンク的存在として機能している。また、地雑穀の利用価値を高めるため、調理時間を大幅に短縮できる「ぷちきびカレー」を開発した。このカレーは防災食やキャンプ用品としても注目を集め、累計 3000 個以上を販売するヒット商品となり、地域の新たなビジネスに繋がりを始めている。菓子処井筒屋と共同で開発した「くまサブレ」もイベント等で販売している。さらに、自由研究キットの配布や子どもたちとの交流を通じて、地域資源の魅力を積極的に発信し、認知度向上に努めている。この持続的な活動は「えひめ地域づくりアワード・ユース 2024」で最優秀賞を受賞するなど、高く評価されている。大切な地域資源を次の世代に受け継ぐため、活動を継続している。

参加者からの声

【質疑応答】

Q 活動の原動力は何か。

A 地域に関わる中で活動が広がることで、普段から楽しく活動することができている。そして、その活動が認められ賞をいただけることもうれしい。

Q 雑穀カレーをレトルトにするのは何が難しかったのか。

A 雑穀の水分量が多すぎて断念することになった。

Q 栽培で苦労されたことはあるか。

A 草刈りが大変だった。収穫が寒いのも大変だった。

Q 地域活性に取り組む学生は県外生の方が多いのか。

A おそらく県外生の方が多い。

Q 自然を生かす久万高原町の地域活性で何かできることはないか。

A モルック大会や竹灯籠祭りなど、いろいろな工夫で地域活性化を目指している。上浮穴高校では、カホンという楽器を小学生と作るイベントも行っている。

Q 久万大豆と他の大豆の違いは。

A 他の大豆よりも久万大豆の方がタンパク質の量が多いという結果が出ている。

【発表についての感想】

○ 大豆を育てるだけでなく商品化するところが素晴らしい。

○ 地域の強みを生かすことは重要。通信環境整備が進む中で、地域活性でもできることがいろいろとあるのではないかな。



第7分散会

ファシリテーター 大野 健司
分散会記録者 河野 健太郎

公民館は可能性の塊！！！！

吉賀町柿木公民館 発表者 円山 洋輔

人口約 5,500 人の小さな町・吉賀町では、公民館が地域づくりの中核として重要な役割を果たしている。「地域全体で子どもを育てる」ことを掲げ、町長も「公民館を核としたまちづくり」を施策に位置づけるなど、公民館を中心に行政と連動した社会教育活動を展開している。

以前は公民館の意義が地域住民に伝わっていなかったこともあり、「公民館＝地域の人たちが輝く舞台」とし、地域全体で子どもを育てるために円山氏自身が積極的に地域に出向き、公民館・学校・地域などとの連携を強固なものとしている。時には中学校の部活動に参加したり、自らの趣味を活用したりして、小さな出会いや活動から大きなものへと発展させている。

『仮説：好きこそ地域の力なり』大好きなものを自分ごととして考え、自分がやりたいことを“地域”というフィルターを通すことで、ちょっとしたことでも地域を巻き込みながら、今後も柿木地域を盛り上げていく。

<柿木公民館の取り組み>

・滝行 ・キャンプファイヤー ・お祭り ・けん玉 ・鮎の放流 ・修行体験 など



伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

愛媛大学 山野 結衣加・寺井 そよ菜

大洲市・西予市を中心に大学生が伊予の伝承文化を学び、小学生に伝える5泊6日のプログラムで、学生自身が企画・運営を担い、地域に根ざして活動するリーダーの育成を目的としている、今年度で19年目を迎える事業。前半3日間は、リーダーシップや子どもとの関わり方、集団作り、伝承文化の学習を行い、後半3日間は、地域素材を活かし、小学生に文化を伝える実践を行う。子どもたちの地域を大切にしようとする心を育むだけでなく、大学生自身も成長を実感できる学びの場となっている。

子どもたちの目線に立って計画をする中で、「言いやすい・覚えやすい・実行しやすい」を念頭に、どのようにすれば子どもたちが楽しんでくれるかを常に考え、挑戦の機会を提供するとともに、子どもたちが“やりたい”と思うプログラムを展開している。

事業実施後、子どもたちが助け合いながら課題を達成した瞬間に立ち合えたことは、大学生自身の教員としての資質向上につながった。今後は、スケジュール感の意識や子どもとの関わり方を工夫しながら、伝統ある本事業を継続していく。



地域の学校等における福祉学習

C I L 星空 高橋 愛実・浅沼 裕子

地域で暮らす障害者からの相談、ピア・カウンセリング等を使用し行う自立支援と、障害理解を促進する啓発活動の2本柱で事業を展開している。約10年以上にわたり、啓発活動の一つとして愛媛県内の学校で福祉学習を実践。障害当事者が学校現場に関わることで、社会モデルの考え方を伝え、インクルーシブな社会の実現を目指している。



一般的に自立とは、身心的自立と経済的自立がある。その他に、他人の手を借りながらも自己決定のもと、自立した生活を障害があっても送ることができる選択肢があるということ、障害者も周りの人も知らないことが多いため、障害者自身が自信を取り戻し、自立のためのトレーニングやサポートを行っている。その他に、小中学校においては、福祉体験学習の一環として、車椅子目線で作った仮想空間の体験や、文字だけではなく、「見る・聞く・触る」読書の方法などがあることをりんごプロジェクト愛媛として広く活動を実施している。これらの活動を行うことで、インクルーシブな社会について考えるきっかけ作りとし、この社会には様々な人がいることを知り、幼少期のうちから当事者と関わることで将来的に見え方が変わってくると考える。

参加者からの声

【質疑応答】

Q 公民館活動を支える仕組みは。

A 公民館が重要な施設であるという町の意味が地域にも浸透してきており、行政と地域とで一体となった取り組みが展開できている。

Q 参加者の募集方法は。

A 公共施設などに依頼しながら施設利用者への声掛けなどを行ってもらっている。また、19年続いている事業であること、実施時期が決まっていることで、事業の認知度が高い。

Q 障がい者との接し方は。

A コミュニケーションをとることで、当事者の好き嫌いを理解していく。健常者の方と同じ接し方でよく、特別な知識はいらない。当事者は、自身を知ってもらうことが嬉しい。

【全体を通しての意見感想等】

○ ランダムに選ばれた参加者から成る分科会で、様々な意見を聴くことで、自身の取り組みも多角的な視点で見つめなおせる機会となった。

○ 発表者として、事業内容や考えをアウトプットすることで多くの気づきを得られる充実した空間であった。

第8分散会

ファシリテーター 本田 精志
分散会記録者 播田 宜子

益田市ひとづくり次世代発、大学生キャンプ

特定非営利活動法人 おむすび 発表者 大畑 伸幸（島根県）

学校や家庭において「発散」や「一緒に喜ぶ」経験が減り、若者が人と関わる力や自分で決める力を育てにくくなっている。人は本来、仲間と食べ、待ち、支え合う存在であり、つながりは善意ではなく生存の基盤である。こうした認識のもと、大学生と子どもが共に過ごすキャンプが実施された。

活動では細かな指示や時間割を設けず、学生は「教える側」ではなく、同じ参加者として場に入った。その結果、子どもたちは当初様子をうかがっていたが、次第に自分から学生に話しかけたり、遊びや役割を提案したりする行動が見られた。学生を「少し先を行く仲間」と捉え、安心して甘えたり挑戦したりする姿が印象的であった。焚き火や食事づくりの場面では、指示がなくても自然に手伝いが生まれ、失敗を笑い合う関係が育っていった。

一方で、自由度の高い環境に戸惑い、「何をしてよいかわからない」と感じる子どももいた。しかし、迷いや不安を言葉にできる関係があったことで、試行錯誤を重ねながら自分なりの過ごし方を見つけていった。自由とは放任ではなく、選択と責任を引き受ける状態である。その負荷を支える安心の土台があってこそ、主体的な行動が可能になる。キャンプを通して、遊びと対話の積み重ねが関係性を深め、地域の基礎体力を育むことが確認された。



法人ボランティア自主企画

国立大洲青少年交流の家 法人ボランティア 発表者 大山 順平・島田 咲絵（大洲市）

1泊2日の自主企画「秋のやってみよう大作戦」は、学生が中心となってゼロから立ち上げた実践である。対象は小学校高学年で、秋の自然を軸に体験を組み、興味関心を広げながら仲間と協働する力を育てることを目的とした。

企画は3月から始まり、役割分担、予算管理、チラシ作成、会場準備までを担った。しかし、拠点間の距離や教育実習、就職活動の影響で打合せが難航し、オンライン会議も議題設定が不十分のまま停滞する時期があった。一方で、活動設計の工夫やアイスブレイクにより、参加者同士の関係づくりには手応えが得られた。また、段ボール等を用いた「秘密基地」づくりでは、材料や表現を限定せず、子どもの発想を尊重した。自由度が高いほど安全配慮と現場判断の難しさが増すこと、活動間のつながりやスタッフ間の認識共有が今後の課題として整理された。ゼロから企画する難しさと達成感を、子どもと運営側が共有した実践である。



伊予市内にてご家族の居場所づくり

poco pono COCO 発表者 太田 聡美 (伊予市)

伊予市中山町佐礼谷地区を拠点に、不登校や生きづらさを抱える子どもと保護者のための居場所づくりが行われている。週1回開かれている「トーキョーコーヒー伊予」は、「登校拒否」のアナグラム（文字を入れ替えてつくる言葉）として名付けられ、学校に行けない状態を否定せず、子どもが安心して過ごせる場として運営されている。活動では、あらかじめ決められたプログラムは設けず、何かをさせることを目的としない。「いてもよい」ことを前提に、人との関係が自然に生まれる場となっている。なお、「トーキョーコーヒー」は西条市や砥部町でも実践されている。

また、保護者同士が思いや経験を語り合う場として「歩登幸カフェ」が開催されている。「歩登幸」は「不登校」を前向きに捉えたいとの思いから付けられた名称で、松山市、伊予市、大洲市、宇和島市、久万高原町、砥部町で開催されている。地域を越えて集うことで、孤立しがちな保護者が安心して言葉を交わせる機会となっている。

さらに、「ぼいけどマルシェ」は一見すると通常のマルシェであるが、不登校家庭を応援していることを出店条件としている。日常の場に溶け込ませることで、地域の中で子どもを支える関係づくりを目指している。あわせて、不登校の子どもや家庭に支援情報が届きにくいという課題に対し、クラウドファンディングにより資金を集め、不登校支援冊子を作成した。居場所は空間そのものではなく、人との関係性の中で形づくられている。



参加者からの声

【質疑応答】

Q. なぜ「教えない」「決めさせる」関わり方を大切にしているのか。

A. 人は自分で決めた経験を通して初めて主体性を回復できると考えているためである。答えを与えないことで、考え、相談し、行動する力が育つと実感している。

Q. 自主企画を通して自身にどのような変化があったか。

A. 準備や判断の難しさを含めて経験したことで、責任感や達成感が高まり、自分たちで事業をつくる自信につながった。

Q. 子ども支援よりも先に保護者支援を重視する理由は何か。

A. 保護者が安心できることで家庭全体の空気が変わり、結果として子どもが動き出しやすくなるためである。

【全体を通しての意見感想等】

- 「自由は不自由」という言葉が印象に残り、自由を支えるためには関係性と安心の土台が必要だと再認識した。
- 子どもに何かをさせるのではなく、大人の関わり方や姿勢そのものが問われていると感じた。
- 居場所は特別な場所ではなく、人との関係性の積み重ねによって生まれるものだと感じた。
- 不登校を前向きに捉える言葉や取組が、地域の空気を少しずつ変えていると感じた。

第9分散会

ファシリテーター 中島 弘二
分散会記録者 松本 拓海

「学びは地域の中にある」

島根県立大学地域政策学部 発表者 三浦 凧

島根県益田市では、ライフキャリア教育やひとづくりに力を入れている。三浦さんは、益田で育ち、小学校6年生での総合的な学習の時間に、「まちづくりプラン」を発表した。その経験から地域の方と関わることが楽しくなり、もっと益田市のことを知りたいと考えようになった。そこから、ご当地アイドル活動やローカルテレビとの共同番組づくりなどを行うようになった。共同番組の「高校生カケル」では、主体的に活動する高校生との出会いがあり、たくさんの価値観と出会った。その「出会い」から、バンド活動まで行うようになった。

今は、島根県立大学地域政策学部で中高生を対象としたイベントの企画・実行や、益田市総合振興計画審議会委員の市民代表を務めている。益田の魅力を再発見しつつ、地域の未来に向けた関わり方を模索している。



34年続く地元の高校3年生主催「夏空まつり」

大和自治会 発表者 篠崎 せいら

大和自治会では、高校3年生が小学生のために企画・運営する「夏空まつり」を行っている。過去は、保護者主催の年や大学生主催の年もあったが、今は、高校生3年生が主催をしている。企画会議には、大人も参加する。それは、困ったときには、いつでも大人を頼ってもよいというメッセージである。運営に必要な予算も高校生が考えており、自分たちで計算等をして運営をしている。小学生のときに参加していた児童が高校3年生になって、企画をすることを楽しみにしている。

多忙な高校生ではあるが、「企画を考えるのが楽しい。」「久しぶりに地元の友達に会える。」「小学生の時に楽しかったから今度は自分が企画したい。」などの思いから企画・運営を行っている。高校生が本気で楽しんでいる姿が小学生の楽しさに繋がっている。小学生のときの楽しかった思い出が34年間の時を繋いできていること、繋いでくれていることに感謝していると同時にこれからも大切に繋いでいきたいと感じている。



「何もない島」から「子育ての島」への挑戦

ごごしまキッズクラブ 発表者 高橋 伸一

高橋さんは、教員をしていたが、教員を辞め、松山市の興居島の地域おこし協力隊として活躍している。興居島に来た当初は、誰もいない公園、人気のない公民館など寂しい島になっていた。「ごごしまキッズクラブ」を立ち上げ、子どもたちが一緒に遊んだり、工作したりする活動を行った。また、「ごごしまま」が発足し、未就学児～小学生などが楽しめるお菓子作り、クリスマス会の企画等を行ってきた。新参者の高橋さんであったが、少しずつ地域の方の協力も得られていくことができるようになった。

ごごしまキッズクラブでは、中学生も巻き込み、子どもたちだけで運営する子ども祭りを行うことができた。市への補助金申請のためのプレゼン子どもたちが行うなど、「子どもたちが元気な興居島」をモットーに日々活動している。



参加者からの声

【質疑応答】

Q 三浦さんが活動を続ける動力源を教えてください。

A 小学校6年生での経験が一番大きい。目上の人と一緒に作っていったことがとても楽しかった。

Q 「夏空まつり」はなぜ受験等もある高校3年生が企画・運営を行うのか。

A 30年前、大人の話の中では、高校3年生は、負担が大きいのではないかという話になったが、当事者の高校3年生に聞くと、高校生活最後に何かを残したいからぜひやってみようという話だった。そこから、高校3年生が企画・運営することになった。

Q 高橋さんの発表の中の、「子どものために考える」とは具体的にどういうことか。

A 子どもを信じるということが一番大切。裏切られることもあるが、子どもをしっかりと守ることが大切である。

【全体を通しての意見感想等】

○ 活動を続けて行くには、地域の人とコミュニケーションをすることが大切だと思う。最初、子どもに「おかえり」というと、「えっ」という顔をされたが、今は、子どもから手を振ってくれる。さらに、地域の中で「ただいま」「おかえり」といえる関係になっている。

○ 実際にやってみるということがよい。学校と地域とがコラボするのは学校側の思いで難しいと感じる部分がある。学校の思い、地域の思いをしっかりと考えていく必要がある。それが、地域コーディネーターの役割であると思う。

○ 子どもたちに教えるには、自分が見本を見せること。言語化して教えること。教える工夫を考えること。具体的にほめること。これらを大切にするとよい。

第10分散会

ファシリテーター 土手 康之

分散会記録者 本明 緑

新小一全家庭訪問、懇談時の保護者カフェ

南部町家庭教育支援チーム「スマイルサポートなんぶ」 発表者 田邊 由紀・泉 絵梨子

南部町は、人口減少を続ける小さな町であるが、「ふるさとを愛し、志高く、南部町から未来を切り拓くひとづくり～自立・共生・参画～」を掲げ、町全体で教育に取り組んでいる。

「スマイルサポートなんぶ」は、基幹チームと訪問支援員で構成されている組織であり、スクールソーシャルワーカーや社会教育主事、幼児保育専門員や教員、PTA会長など、様々な人たちがメンバーになっている。新一年生になる家庭を全戸個別訪問し、入学前の不安や通学状況の聞き取りを年間3回に分けて行っている。訪問を重ねるうち、家庭のその後の様子が気になり、スマイルカフェ（継続した相談や保護者同士の交流を目的にし、「気軽に集える場所」「人と人との関わりがある場所」）を始めた。今年度は、43家庭（46名）の保護者が利用し、学校内にスマイルカフェを設けて、懇談時に話ができるようにしたところ、保護者からは喜びの声があふれ、保護者同士で気楽に話し合える場となった。チーム員としても、家庭訪問後の様子を知ることができ、安心したとの声があがった。事業の成果として、保護者同士、保護者とチーム員、チーム員と学校とのつながりができ、疑問や悩みが解消されたり、活動の場が広がったりした。今年度初めて実施したため、知名度が低いですが、もっと知ってもらえるように広報していきたい。



学校行事のお手伝い・イベント開催

松前町立岡田小学校おやじの会 発表者 三好 寛幸・長島 祐介

「おやじの会」は、子どもたちの安全と笑顔を支える裏方的存在として、学校イベントの手伝いを行っている。参加を希望する人で成り立っており、新しいコミュニティができるだけでなく、子どもたちが学校を楽しんだり、子どもを支えたりする力につながっている。

運動会では、朝から交通整理を行ったり、観覧者の案内をしたりした。また、餅つき大会の運営も行った。夏休みには、「岡小ステイ」という防災を学びながら1泊2日のキャンプの運営も行っている。役場の方に防災の講習をしていただき、災害時に大切なことを学ぶことができた。他にも、段ボールベッドを作成したり、学校のプールを貸し切って遊んだりした。松前町伝統である、はんざり体験を行ったり、子どもと保護者が一緒にカレー作りを行ったりした。夜は花火大会や校内探検をした。就寝時は段ボールベッドやテントで寝た。2日目は朝ご飯作りや、体育館でのドッジボール大会、公民館等で借りた遊具遊びなどした。「岡小ステイ」を行うことによって、「災害に自分の身を守ること」「友達との協力すること」「忘れられない夏の思い出を作ること」ができた。子どもたちだけではなく、保護者同士や先生との絆を深められたと思う。子どもたちの忘れられない体験を届けることができた。



松山工業高等学校で防災啓発活動してます

チーム Save Our Future 発表者 松本 果澄・高市 真歩

「Save Our Future」は、2018年西日本豪雨でのボランティア参加をきっかけに立ち上げた組織である。防災啓発活動は、若者が率先して行っていく必要があると感じている。



啓発活動として、防災カードや教材の作成を行っている。フェスタやイベントに参加したり、小中学校に出前授業に出向いたりしている。また、防災体操を開発し、広めている。出前授業後のアンケートで、防災意識の上昇が分かった。さらに、愛媛調理製菓専門学校と協力し、防災食を考案した。新聞紙でのゴミ箱の作成や防災時でも簡単にできる親子丼の調理方法を学んだ。また、防災をもっと楽しく簡単に学ぶことができるよう、ゲームで防災を学べるように研究している。全世代の人を対象に、オンラインゲームや防災カード合わせゲームを考案した。「マイタイムラインカード」という、災害発生時、自分自身がとる行動を時系列的に考えるゲームも考案した。実際に学校に訪問し、学生や教員の意見を取り入れて実施した。道具やマニュアルも全部用意した。さらに、全国の高校生とのオンライン、対面交流もしている。大学生や各防災士会とも交流し、読売中高生への取材も行った。女性と防災の会からアドバイスをいただいたり、SOF新聞の作成をしたりした。環境ユース大会やえひめSDGs甲子園で入賞している。

参加者からの声

【質疑応答】（一部）

Q 活動を実施するにはノウハウが必要だと思うが、アドバイザーがいたり、研修はあったりするの？

A 県の家庭教育の研修が年に2回ある。

Q おやじの会で使うお金はどうしているの？

A 参加費を徴収するか、お米を持ってくるようにしていた。また、PTAからの補助もあった。

Q 防災食の親子丼以外にはどんなメニューがあるの？

A ミネストローネも簡単にできる。レシピも作っている。

【全体を通しての意見感想等】（一部）

- 家庭訪問に外部の方が来ることに驚いた。愛がある。
- 支援している側と支援されている側の三者三様の意見が聞けた。子どもを育てる側ではない人としての面として考えられた。
- 子どもたちだけでなく、お父さん方も楽しめている活動だと思った。
- 県外からきた保護者にとっては、地域のつながりありがたい。
- 高校生が防災について意見を広めていくのは、夢がある。
- 高校卒業後、自分の町に戻ってきてほしい気持ちを押し付けるのではなく、自分の町に誇りを持って戻ってきてほしいので、そういった町づくりをしていきたい。
- 誰かのために動こうとしている、役に立とうとしている人が集まっていて、温かった。



第11 分散会

ファシリテーター 本多 正彦
分散会記録者 西村 隆信

居場所：こころの銭湯🔥「まんまある」

まんま会 発表者 貞平 理恵

2011年「ありのまんまの自分を大切に」をコンセプトに立ち上げられた「まんま会」。映画上映、おしゃべり会、コンサート等を開催してきた。その後、元銭湯をリノベーションし、「子どもも大人も心が軽くなる」こころの銭湯🔥「まんまある」の運営を開始。子供たちのまんまスクール、大人の道徳授業、寺子屋、マルシェ、ライブや上映会等、子どもからお年寄りまで心から楽しめて、楽になって帰れる居場所を目指して活動している。



まんま会の「まんま」には、ありのまんまの「まんま」、食事の意味の「まんま」、神仏の意味の「まんま」様、母親という意味の「まんま」の意味が込められている。

まんま会のSNSのグループには、約200人が登録をされており、月に2,3回程度活動を行っている。イベントごとに参加者や協力者は違っているが、参加者はもちろん、主催者も楽しんでおり、子どもからお年寄りまで、心から楽しめているからこそ、活動が継続できている。

普通だけど普通じゃない地域に根ざした学校

愛媛県立三崎高等学校 発表者 佐藤 出帆・横山 紗華・津田 一幸

三崎高校（みさこう）は、日本一細長い佐田岬半島の先端にある四国最西端の学校である。愛媛県で高齢化率が2番目に高いこの地区の学校に、毎年全国各地から多くの入学生が集まっており、全校生徒約150名のうち、半分以上を寮生が占めている。



「みさこう」の大きな特徴は、地域との協働活動を取り入れている点である。地域に頼るのではなく、地域と共に活動をしている。「せんたんプロジェクト」は、地域の担い手不足が深刻な地域で、地域の良さを

再発見し、地域の魅力となるものを作り、地域を守ることを目指して始まったが、現在は、10年、20年先の世界でも活躍できる人材の育成を目指して活動を行っている。主な活動として、五つ鹿、唐獅子、巫女等、地域では存続が危ぶまれた郷土芸能を高校生が受け継いだ「みさこう郷土芸能」、伊方町でカフェをしたいという思いを叶えた「みさこうカフェ」、南予地域を世界農業遺産にするために、柑橘類の味マップを作ることにした「かんきーず」などがある。

交通の不便さ、多忙感、過疎化等、様々な問題はあるが、これからも「みさこう」は、地域の一員として、日々地域で暮らし、地域で遊び、地域で学びながら、みんながさいこうにきらきら輝ける学校づくり、まちづくりを目指して、様々な活動に取り組んでいく。

人権啓発劇上演と人権・同和教育研修会開催

みんなで人権を考える会「ころん」 発表者 西山 博・吉田 和仁

平成 22 年、「何かやりたいね」との話し合いから、本会を立ち上げ、人権啓発劇に取り組んできた。平成 25 年からは、今治市・越智郡の小・中・高校に案内をして、人権・同和教育研修会を開催している。

目標は、①部落差別の解消、②社会貢献、③差別をなくす仲間づくりの 3 つで、無理をせずに、参加できるときに参加できる人が集まって、研修や劇の上映ができればという思いで取り組んでいる。取り組んできた人権課題は、部落差別、高齢者、いじめ、性的マイノリ



ティなどがある。人権啓発劇では、前半上演、後半「ふれあいトーク」で意見交流を行い、テーマを深めている。近年、期待しているほどの参加はなく、初年度は 500 人程の観客がいたが、現在は 150 人程度になっている。また、人権・同和教育研修会は 30 名程度の参加者ではあるが、小・中・高の教員と一緒に研修できる良い機会になっている。

今後は、他の人権課題に取り組んでいる自主グループとの交流を行うことも視野に入れながら、人権啓発劇や研修会を通じて、若い世代の方々へ「ころん」の思いを伝えていきたい。

参加者からの声

【質疑応答】

Q 「まんま会」の活動の資金は？また、行政との連携はあるのか？

A 活動拠点をレンタルした際のレンタル料、助成金、それぞれの活動の活動費で賄っている。行政と連携することは、活動の幅のことを考え、今のところ連携はしていない。

Q 三崎高校で指導される先生方はどのような研鑽を積まれているのか？

A 自分から県の勉強会に参加したりすることもあるが、勉強会等への参加は必須ではない。三崎高校歴が長い方が、着任した先生に教える。また、地域の方が、先生方に教えてくれる。新しく赴任した先生方も三崎高校の特徴を認識してもらっており、戸惑う先生方は少ない。

Q 「ころん」の人権啓発劇への参加者が少ないとのことだが、どのような広報活動を行っているのか？SNSの利用は？

A 「ころん」としては、SNSはしていないが、メンバー個々ではやっている方がいる。新聞購読者数も減っているので、SNSの活用もよいが、お年寄りには紙媒体が良い。

【全体を通しての意見感想等】

○ 三崎高校の教育の広がりはいくらだと感じている。卒業生が全国に広がっている。

○ NPO法人石井わくわく物語という組織を作り、相乗り移動サービスを石井地区で行っている。活力がある地域だからこそ、今のうちに取り組んでおきたい。

○ 10年ぶりに参加した。様々な方が年代関係なく、様々な活動に取り組んでいると感じた。

○ コロナ禍でオンラインの時期もあったが、やはりリアルに会えたことが良かった。この出会いが、次に繋がっていくと感じた。

第12分散会

ファシリテーター 高橋 和紀
分散会記録者 宇津 博美

CS推進支援と地域の子育て・不登校応援サロン

四国まなび未来ネットワーク研究所 発表者 赤松 梨江子

2016年から文部科学省CSマイスターを務める赤松さんは、徳島県内のコミュニティ・スクールで、学習支援や居場所づくり、環境整備等に関わってきた。その中で、学校にとどまらず、地域での居場所の必要性を強く感じ、「子育て・在宅の子（不登校）応援サロン カフェブルースカイ」をオープン。夏カフェやおとなカフェなどの活動を実施した。利用者アンケートでは、学習支援を進めてほしい、学校の出席に認めてほしい等の声があったため、今後取り組んでいく予定である。子どもを学校に戻すことではなく、社会につなげるために、保護者や専門機関との連携を大切にしていきたいと考えている。



子育てサロンや家庭訪問型子育て支援

子育て応援団あいいく 発表者 田村 ひろみ・玉井 利江

2023年に「子育ての応援がしたい！」と、地域の子育て経験者がメンバーとして集まり、「子育て応援団あいいく」を結成した。寄り添い型の育児支援や気軽に話ができる場の設定を目指し、親子が集えるサロンや子育て講演会を開催した。

2025年には、愛媛県で初めてのボランティアによる家庭訪問型子育て支援「ホームスタート・あいいく」の活動準備を始めた。ホームスタートとは、友人のように一緒に過ごし、親子に寄り添う支援のことである。今後、「ホームビジター養成講座」を終えたボランティアによる家庭訪問が始まり、「子どもも親も、そして地域の大人たちも、共に育ち合う関係」を目指していく。



俳句を活用したイベント

まつやま俳句でまちづくりの会 発表者 キム・チャンヒ・近藤 拓弥

俳句は、難しく敷居の高いものと思われがち。そんなイメージを払拭するような俳句イベントを開催し、人々の交流を補助したり、地域の魅力を再発見したりすることに寄与する活動をしている。例えば、音楽と俳句のセッションをした「音楽祭」や自然観察をしながら俳句を作る「俳句作りバスツアー」、句会の楽しさを体験するワークショップ等を実施した。ま



た、吟行会や自分で漉いた和紙に自分の俳句を書くイベント等、俳句を使って地域を見直す機会を作った。このような活動を通して、俳句は、地域の魅力を伝えたり、心を表現したりすることができる分かった。俳句という文化は、人を育てたり、地域を育てたり、よりよい町をつくるきっかけになると考えている。

参加者からの声

【質疑応答】

<CS推進支援と地域の子育て・不登校応援サロン>

Q 中学生と地域のつながりはどうしているのか。

A 一人でも居場所を必要としている子がいるのなら、開けて待つておくという気持ちでいる。

Q 不登校児の保護者への対応は、どんなことをしているのか。

A LINEで情報提供をしたり、悩みを聞いたりするなど、不安な気持ちを吐き出す場を用意している。

Q 手広く活動するエネルギーは、どこからくるのか。

A いつも、3K（好奇心、向上心、感謝）を大切にしている。

<子育てサロンや家庭訪問型子育て支援>

Q 男性ビジターは、どのくらいいるのか。

A 10人くらい。

Q 守秘義務はあると思うが、家庭の状況に応じて専門機関とつなぐことはあるのか。

A 虐待が疑われる場合には、通告義務があるため、すぐにつなぐ。その他については、基本的に口外しない。

Q 行政との連携は、視野に入れているのか。

A 今後は、市の委託事業にしたいと考えている。



<俳句を活用したイベント>

Q 発想やネタは、どこから生まれるのか。

A 俳句をカッコよく見せたい！という思いから生まれている。また、どうすれば、みんなが俳句を作ることができるかと考えている。

Q キムさんと俳句の出会いとは？

A 前職の退職した直後、俳句の冊子のデザイン作りをする機会を得た。そこで俳句と出会った。

○ 俳句が入口になって、人や地域とのつながりが増えているのが素晴らしい。

○ 今日、俳句作りを体験してみて、俳句作りへの印象が変わった。

第13分散会

ファシリテーター 大美 和博
記 録 者 澤井 辰之

BG kids (ビジーキッズ) トクシマ

ボードゲームなど室内ゲーム文化の普及活動 発表者 中西 裕子・岩木 太郎

BGはボードゲームの略。地域教育にボードゲームを活用してほしいという願いから発足した。四国大学ボードゲーム部や徳島大学の学生と協力し、活動を行っている。主な活動内容は、小学校や学童クラブ、児童館などに出向き、出張ゲーム会を行ったり、キッズゲーム祭りという子どもから大人まで無料で楽しめるイベントを行ったりしている。また、ボードゲームの活用について研修会を行い、ボードゲームの普及や地域教育への活用方法を伝えている。

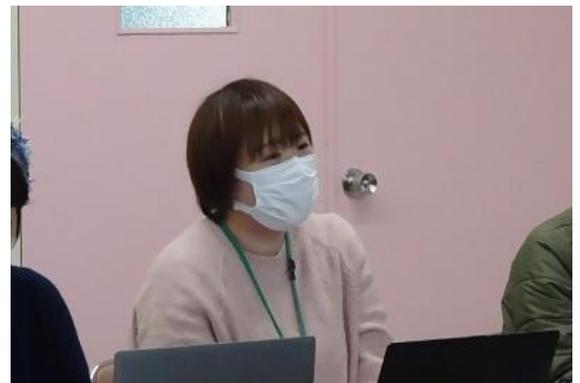


具体的な活用事例として、①防災イベントでのアイスブレイクに活用したこと、②ボードゲームで地元のことを学ぶことができるように、徳島県を知ることができるオリジナルボードゲームの開発を行ったこと、③言葉の壁を越えた交流活動になるよう、外国の方との共生社会を目指して活用していることが示された。

こども家庭センターat 高齢者大学

普段は子育て支援していますが、今回は・・・ 発表者 平井 栄理子

発表者は普段、松前町で子育て家庭や子どもに関する相談、支援を行っている。とあることがきっかけで、西公民館で行われている「高齢者大学」に参加するようになった。きっかけは、役場人生で若かりし頃からお世話になっている西公民館長からいただいた電話だった。公民館長の熱い思いから、高齢者大学での講演をすることになり、健康で生きがいをもって、自分らしく過ごしていくためのコツや考え方などを話したり、松前校区の子どもや子育て世代の現状などを伝えたりした。



高齢者大学の参加者は、地区区長、老人クラブ会員、婦人会会員、防犯委員、交通安全指導員、元民生・児童委員、各種ボランティア団体構成員など、地域で子どもたちを見守ってくれている方ばかり。話してみると、高齢者の方は、子どもたちと関わりたい気持ちがあることが分かり、子どもたちと高齢者をつなぐことはできないかと考えるようになった。今後は、松前町のインターメディアエ이터として、コミュニティのタテ・ヨコ・ナナメ・アイダをつなぐ存在でありたいと考えている。

ひらの未来塾

ひらの未来塾（夏休みの学習支援） 発表者 福本 政代

ひらの未来塾では、高校生、大学生のボランティアや地元の教員OB、地域の人らが協力し、夏休みの宿題などの学習支援を行っている。夏休み明けに子どもたちが登校しにくくなる主な理由が、生活リズムの乱れや人間関係の悩み、宿題などであることが分かり、改善できるようにという思いで始めたのがきっかけ。不登校気味だった子どもたちが、未来塾に通い2学期から登校できるようになったこともあった。学習塾とは違い、自主的に学習するよう促している。参加者は年々増えてきている。ボランティアも最初は18名程度であったが、現在は57名まで増えている。



また、保護者から様々な要望があり、読書感想文教室や習字教室、ドローン教室を追加したり、子ども食堂を行ったりしている。アンケートでは、ほとんどの家庭から「参加させてよかった」と好意的な意見をいただいた。

参加者からの声

【質疑応答】

- Q キッズゲーム祭りの参加者が増えている理由は。
- A 最初は、コロナ禍で参加者が少なかった。そこから様々な方に協力してもらい、木のおもちゃで遊べるブースや、簿記を学べるブース、科学ブースなどを入れ、小さい子から大人まで楽しめるよう工夫した。また、ボードゲーム部の活動の一環として行われるため、会場費が無料になることが大きい。
- Q ボードゲームに参加している子どもの変容について。
- A ボードゲームは大人も本気ででき、白熱する。年齢関係なく本気でできることが魅力である。また、テレビゲームは1人でできるが、ボードゲームは多人数であるため、いろいろな人とできる。子どもたちに、洞察力やイメージ力、コミュニケーション能力など、様々な力がついていると思う。
- Q 来年度以降の活動の予定は。
- A 社会教育課とプランを立てている。応援できる人たちをつないでいきたい。
- Q 仕事のやりがいは。
- A 保健師は地域に居続けることが多い。小さいころから関わるため、大きくなるまで見守っていくことがやりがいになっている。
- Q スタッフへの謝金や子ども食堂の運営費用はどうされているのか。
- A ボランティアの方は厚意で協力いただいている。子ども食堂は、1回100円を支払ってもらい、足りない部分は、農家さんや養豚業者さんが寄付してくれている。また、自治会へ掛け合い、援助をお願いしている。
- Q ボランティアのメンバーをどのように集めているのか。
- A 高校や大学に依頼し、チラシを配ってもらった。

【全体を通しての意見感想等】

- 地域教育の話聞くことができ、家庭と地域のつながりが大事だと思った。
- 世代を超えて活動、交流することが素晴らしいと感じた。
- 本気の熱意をもっていると感じた。大学職員の参加が少ないので、もっと参加してほしい。
- できない理由を考えない姿勢が素晴らしい。みなさんが、どうしたらできるのかを考えている。
- ボードゲームの話が面白かった。自分の活動にも生かしていきたい。

第14分散会

ファシリテーター 上田 和子
分散会記録者 三瀬 綾斗

だれもがほっとして笑顔になる居場所づくり

一般社団法人 もうひとつの大きな家族 発表者 野村 ゆかり

元教員の野村ゆかり氏は、社会教育士の資格取得を機に、高知市で一般社団法人「ほっと笑」を設立した。本活動は、学校教育の限界を感じた野村氏が、行政・地域・学校を繋ぐ「地域のプラットフォーム」構築を目指したものである。「ほっと笑」は、こども食堂や地域サロンの役割も兼ねており、週3回の昼食提供や50世帯への弁当配達を行っている。また、配達時には独居高齢者の安否確認や子育て相談も兼ねており、40名を超えるボランティアが自家菜園での野菜栽培や調理、イベント運営を支えている。特筆すべきは多機関との連携であり、地域包括支援センターからの紹介を通じて、孤独感や不安を抱える層の「心のよりどころ」として機能している点である。また、社会教育士として行政の部局間連携を働きかけ、コミュニティ・スクールの推進や研究会の発足にも尽力している。運営費は公的補助金や寄付、助成金で賄っているが、今後は次世代への継承と持続可能性の確保が課題である。



「ふるさと」を問い続ける学生団体

学生団体ブーメランカレッジ 発表者 井上 弘一朗・高田 貞治・濱遊 玲音

愛媛県南予地域出身の大学生らで構成される「ブーメランカレッジ」は、「大学はないが大学生は全国にいる」という現状を強みに変え、若者が離れても関わり続けられるふるさとづくりを実践している。彼らは地域最大の未活用資源を「ふるさとを離れた若者」と捉え、地元の小中高生に向けた「わたしとふるさとゼミ」を展開している。



本事業は、クラウドファンディングで募った約270万円の資金を基に、宇和島圏域の中高生を対象とした3泊4日の合宿形式で実施された。一次産業や歴史文化などのテーマごとに5つのグループに分かれてフィールドワークを行い、大学生がメンターとして伴走することで、学校教育では得られない地域の魅力を伝えることや、地域で自分の物語を作る手助けをしている。その活動の背景には「思い出のない地域には帰ってこない」という仮説があり、18年間でふるさとの良さに気づかせることが、将来的な還流や関係人口の創出に不可欠であると考えている。

今後は法人化を視野に入れ、同窓会ネットワークの構築やサードプレイス・ユースセンターの運営など、思い出と移動が循環し続ける仕組みの構築を目指す。

東谷小学生との稲作体験としめ縄づくり

河之内稲作体験としめ縄づくり 発表者 浅野 和雄・田房 克寿

愛媛県東温市河之内地区では、学校と地域が連携し、米作りから伝統行事へと繋がる一年を通じた教育活動を実践している。本地域では多世代交流の重要な基盤を担っている取り組みである。

活動の柱は、5月の田植えから始まるもち米栽培である。手刈りや天日干しといった伝統的な手法を体験させる中で、刃物の扱い方など、地元に根付く文化の



継承をしている。収穫したもち米は、地域の餅つき大会や子ども食堂への寄付に活用され、食を通じた支え合いを学んでいる。また、収穫後の藁を用いて全長 10 メートルを超える巨大な龍を製作し、神社に奉納する行事は、地域の一大行事となっている。

さらに、地域の運動会や防災訓練、専門家を招いた食育など、地域住民と子供たちが関わり合う多世代交流の場が幾重にも構築されている。これらの活動は、単なる体験に留まらず、子どもたちに強烈な故郷の思い出を刻むものである。発表者は、この伝統を次世代へ引き継ぎ、100 年続く地域文化として定着させることを目指している。

参加者からの声

【質疑応答】

- Q ほっと笑の事業内容に「史跡巡り」とあったがどんなところを巡っているか？具体的な内容を知りたい。また、対象者についても知りたい。
- A 高知城歴史博物館の学芸員や副館長と野中兼山が作った用水路や新田町・百石町を巡りながらの名前の由来や歴史について学んだりしている。対象について、以前は小学5年生だったが、今は地域の方々を始め多くの方に参加いただいている。
- Q 地域で技術（知識）を持っている方がいなくなり、その技術（知識）を引き継ぐ人もいない。そのことについてどう考えているか。（後継者問題）
- A しめ縄でも同じ問題が起こっている。子どもたちへの指導もそうだが、それを教えられる大人も減っている。そのため公民館などで、地域の大人に向けて技術を教える活動も行っている。

【全体を通しての意見感想等】

- 独居高齢者を訪問し安否確認を行ったり、子育て相談を行ったり幅広い世代への支援（ケア）を行っていることに感動した。
- 思い出のない地域に若者は帰ってこない。18歳までの多感な時期に、地元の歴史や面白い大人、祭りのような年中行事に触れる機会を組み込むことが、将来的な U ターンのカギとなる。
- しめ縄づくりのような地域行事は東予各地で行われていたが、コロナを期にやめた地域が多くなった。河之内地域はコロナ禍後も活動を続けているのはすごいと思った。

第15分散会

ファシリテーター 遠藤 敏朗
分散会記録者 須山 華鈴

高知大学地域協働学部大槻研究室

高知大学地域協働学部 発表者 大槻 知史

大槻研究室では、従来の「怖い」というイメージを払拭し、楽しみながら命を守る新しい防災の形を提唱している。

四万十町興津地区では、学生が津波避難タワーに宿泊し、避難時の生活を仮想体験した。学生が地域住民の代理体験をすることで見えた課題は、風よけの整備に繋がり、日々の暮らしや豊かな里海を守るという地域の誇りへと昇華されている。

また須崎市須崎地区では、子どもたちがデザインした光で避難所を彩る「Light up the Life!」をおこなった。美しいイルミネーションを入り口に、訓練から足が遠のきがちな若者や家族連れを避難施設へ呼び込み、夜間の避難体験や住民交流を促すのを狙いとしている。

これらの根底にあるのは、防災を「特別な行事」ではなく「楽しみながら大切な日常を守り育てる手段」と捉える考えだ。災害の恐怖に備えるだけでなく、今ある地域の美しさや暮らしを愛し、守ろうとすることが、結果として命を救う行動へと繋がる。防災は、日々の暮らしや地域への愛着を育む「希望の光」であり、未来へつなぐものである。



なんよナンジャー

社会教育士 発表者 菅 華守民

社会教育主事講習を受講し、そこで「南予ナンジャー」という最高の仲間に出会った。立場や年齢は異なるが、共通の目的のもと、心をついに学んだ。全員が状況に応じてリーダーシップを発揮する「シェア・ド・リーダーシップ」を大切にしている。こうした学びの中で、改めて地元の良さに気付くことができた。

この絆を未来へ繋ぐため、同窓会やオリジナルTシャツの作成、SNSでの情報共有を継続している。

単なる友人とも縦の関係とも違う、互いを認め合うフラットな「橋渡しのネットワーク」が人生の大きな支えだ。「まずは顔を出し、相手の思いを受け止めてその場を楽しむこと」をたいせつにしており、これが活動継続の秘訣と言える。

「社会教育」という学びの場を通じて生まれたこの熱い繋がりには、自分自身を成長させ、地域のために活動を続ける大きな原動力となっている。「出会いを未来につなげる」ことは、「つながりを続ける」ということ。今後も繋がり続け、学び合える仲間に出会いたい。



お鬼楽塾

鬼北町公栄塾 お鬼楽塾 発表者 浅越 聖光

2022年に始まった鬼北町の公営塾「お鬼楽塾」は、学び・広がり・憩いの三つの機能を持つ。自習型の学北宇和高校の生徒を対象に鬼北町が運営している塾である。自由型の学習支援に加え、マルシェ出店や楽器演奏などの体験活動を重視し、塾生の「やってみよう」という意欲を後押ししており、基本的には塾生発信ですべての企画がスタートしている。



学校でも家でもないカフェのような空間は、強制のないサードプレイスとして、放課後に羽を伸ばせる貴重な場となっている。スタッフは身近な存在として寄り添い、学校に行きづらい子の受け皿としても機能している。

活動の根幹は、生徒の取捨選択を尊重しており、決して強要や強制はしないのがルール。また、塾単体では成り立たないので、関係性の構築が活動の基盤となっている。地域や学校とのコミュニケーションを大切にしている。

参加者からの声

【質疑応答】

Q 教員をしていたからこそ思う、これからの学校や教育のあり方は？

A 二極化が進むと思う。その中で、下の子たちを受け入れる受け皿が必要。これから先はより混沌としていく。だからこそ学校だけでは厳しい。子どもが多様になるからこそ、それを受け入れる受け皿を用意することが必要。

Q 高校生はやらされてる感が強くなってしまふ。高校生のころからボランティアを続けている原動力は何か。

A しくみにしていけばいくほど、離脱する人もいる。私ほうまくはまっただけかもしれない。実際一緒に講習を受けた中には辞めた人もいる。高校生の時に大学生の人がおり、付いていきたいと思える人が多かったのも要因かも。

【全体を通しての意見感想等】

- 失敗を許容できる社会が必要なのではないか。「なんかあったらどうするの。」という声もあるが、なんかあった場合のためにやるべき。多少リスクをとってもやってみることは大切。失敗しても、それを機に変えていくべき。
- 子ども自身で判断するというのはやはり大切だと思った。子どもたち自身で考え、大人や下級生に伝えるという過程が大切。
- 社会教育っていいなと思った。子どもたち自身で考える、サードプレイス、全てのことに目を付けながら、各々がそれぞれの立場で実践していくしかない。

第16分散会

ファシリテーター 佐藤 淳子
分散会記録者 阿河 優里

移動本屋スタイルで地域を繋ぐ

別大ブック 発表者 古江 昭宏

2015年から大分県大分市東部で活動している移動本屋は、本が身近にある一方で本屋が存在しない地域の現状に着目し、ワゴン車で本を積んで地域を巡回している。移動図書館とは異なり、「本屋」だからこそ流行や人気の本を届けられることや、売る本を読み聞かせるという独自の取り組みが特徴である。個人宅や病院、駄菓子屋の駐車場などにも出向き、乳幼児への読み聞かせや高校生による読み聞かせ活動を行い、子どもたちが本を読んだり宿題をしたりできる居場所をつくっている。卸売業ならではの柔軟さから、乳幼児が本を破っても温かく受け止める雰囲気があり、安心して本に親しめる環境が整っている。こうした活動を通して、本屋という空間を人と人をつなぐ場として活用し、子どもから学生、そして親へと世代を超えたつながりが循環する地域づくりを目指している。今後は紙芝居の導入なども検討しながら、地域と共に生きる活動を続けていく予定である。



高校生のやりたい！から久万高原町を元気に

きらくま 発表者 チェンシィー未明フィデリア
野口 瑠月

「気楽に久万高原町を発信しよう」という思いから誕生した高校生主体の活動グループ「きらくま」は、動画配信や商品開発、ラジオなどを通して地域活性化に取り組んでいる。ラジオ活動は、支援者である酒井さんの「ラジオをしてみたら？」という一言をきっかけに始まり、CMコンテストへの応募などにも挑戦した。試行錯誤を重ねる中で、高校生ならではの会話を楽しめる活動へと成長している。

また、スパイスプロジェクトでは、文化祭での販売を経て商品化に成功し、現在はふるさと納税の返礼品にもなっている。これらの活動は「好きを原動力に」進められており、メンバーそれぞれの興味や関心を久万高原町の魅力発信につなげている。活動は授業外の課外活動として行われ、酒井さんは最初のきっかけを与えるのみで、運営は高校生が主体となっている。拠点は町のコミュニティスペース「ユリラボ」で、町や学校の協力も得ながら継続している。先輩たちの楽しそうな姿に影響を受け、新入生の参加も増えており、今後はグッズ制作や、より多くの人を巻き込んだラジオ活動を目標としている。



人と共に生きる自立した子どもを育てる場所

子どもの居場所作り支援隊「えがお」 発表者 関 芳子

関さんが立ち上げたこの活動は、特別支援の現場での経験を生かし、障害の有無に関係なく、人として当たり前の挨拶やマナーができることを大切にしている。子どもの自立を大切にした安全・安心な居場所づくりを目的としている。学年が上がるにつれて学童の利用が減ることや、長期休みの際の預け先不足、地域行事の減少といった課題にも対応し、イベントや防災キャンプ、ものづくり体験を通して、他者を思いやる気持ちや計画力、優先順位の判断、気配りなどを子どもたちが自然に身につけられる場となっている。



また、大人にとっても子どもの姿から新たな気づきを得られる貴重な場となっている。この活動では、人として当たり前の挨拶やマナーを大切に、子ども自身が「誰に、何を助けてもらうか」を考える力を育てている。学校では難しい取り組みを地域の個人事業主などと連携して行い、親子や地域との関係も尊重しながら、「みんなで作る居場所」として地域に開かれたモデルを今後広げていくことを目指している。

参加者からの声

【質疑応答】

Q ネットで本を買える時代に「移動図書館」ではなく「移動本屋」をするのか。

A 手に取ってページを開く、質感や重さを感じて本との出会いを大事にしてほしいから。

Q. 地元のふるさとで活性化はしないのか。

A. 地元とは地形や景色が異なり、久万高原の自然に惹かれて選んだが、久万高原には人が集まりにくいという現状があり、「どうにかしたい」という思いがあった。一方、地元は久万高原とは異なりすでに街が栄えているため、「活性化をやりたい」とは思わなかった。

Q. 保護者との連携で困ったことはあるか。

A. 保護者は活動の理念を理解したうえで参加しているため基本的には特に困ったことはあまりない。保護者には、自分の子ども以外の子どものとも関わるよう伝えているため、他児の良いところに気づくことができる。それを保護者間で共有することで、お互いを高め合える関係が生まれている。

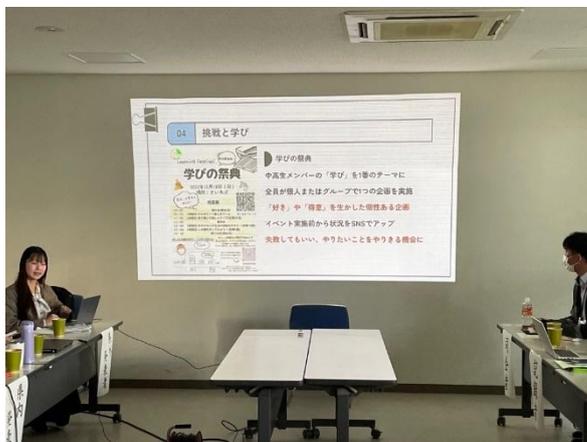
第17分散会

ファシリテーター 山本 将義
分散会記録者 隅田 直軌

喜入にマナビバを

喜入マナビバプロジェクト つわぶき 発表者 東 琴乃

高校の探求の時間に喜入のためにできることをテーマに取り組む中で、地域で活動する大人がいると知り、私も本気で喜入のために何かをしたいと感じた。自分の困りごととして、家以外で勉強できる場所がなく、同じように地域の中学生の約8割が自習室が欲しいことがわかった。そこで、小中高生の学びのサポートを目的に2021年から活動を開始した。お寺での自習室の開設から始まり、今では喜入中学校の定期テスト前に喜入公民館での無料開放型自習室の開設や学習サポーターによる質問ブース、天体観測会や高校相談会、他団体と連携した地域活動などの企画・運営に取り組み、メンバーの学びにもなっている。中高生20名を中心に運営し、卒業生や会計などを支える大人、地域外のメンバーも参加している。卒業生や地域の大人の方たちが中高生の挑戦を支えている。中高生の「やりたい」を実践し、失敗と成功を繰り返して成長している。地域と若者が共に育ち合う、喜び入る学びの場となっている。



大好きな伊予市の海で地域と人との繋がりを広げています

伊予市の海をきれいにし隊 発表者 友澤有希子・高木綾子

2019年、子どもの自由研究で伊方町の漂着ゴミスポットでの海岸清掃に訪れ、2メートルもの高さまで積もった海ごみを目の当たりにして衝撃を受け、漂着プラスチックの問題を知った。大好きな海から少しでもゴミを減らしたいと考え、毎月の海岸清掃に参加しはじめ、自分の住む地域の海岸も綺麗にしたい住民が多くいることを知った。2022年、伊予市の海をきれいにし隊を発足し、地元の五色浜海岸で誰でも気軽に参加できる形式の海岸清掃を始め、月1回第3日曜日の夕方に開催している。海岸清掃、生物や自然に感謝をもてる実体験の場となっており、小学校の授業や夏休みワークショップで海ごみ講座やビーチクリーンを開催し、小学生が環境問題を学ぶ機会にもなっている。また、JICAや地域おこし協力隊との交流やビーチヨガ、フラダンスイベントとのコラボなど、活動が広がっている。この活動は、無理のない回数で、その人なりの参加の仕方で開催しており、参加者一人ひとりの思いを大切に、海辺での時間を共にし、活動によって人を育むことで、参加者に幸せを感じてもらうことを大切にしている。



不登校・行き渋りの子どもの居場所づくり

NPO 子どもサポート ほがらか 発表者 佐々木 知佳

社会には、不登校・行き渋りの子どもたちがいるため、そうした子の居場所を作りたいと考えて活動を始めた。2023年4月に団体を設立し、不登校・行き渋りの子どもの居場所づくり・学習サポート・家族の息抜きの場づくりの活動を行っている。初年度は地区の公民館で小規模の子どもの居場所づくりの活動を行い、翌年は、団体や活動を知ってもらうための月1回程度の交流活動を開催し、地域食堂や高校との共催イベント、文化祭での活動展示を開催した。2025年度は、まさきふれあい学園の町民企画講座として年4回「長期欠席への理解を深める学習会」を開催した。それぞれの子の不登校・行き渋りの理由は違うが、居場所を作り、楽しく過ごしてもらう中で、子どもたちへの理解が深まり、相談機関へのつながりづくりができるとよい。今後は、子どもや保護者の居場所づくり、地域の交流の場づくり、不登校・行き渋りの子どもや家族へのサポートという3つの活動に取り組みたい。子どもたちへの思いのある大人と子どもをつなぎたい、家庭・学校・地域で子どもたちを温かく見守ってほしいという思いで活動している。



それぞれの子の不登校・行き渋りの理由は違うが、居場所を作り、楽しく過ごしてもらう中で、子どもたちへの理解が深まり、相談機関へのつながりづくりができるとよい。今後は、子どもや保護者の居場所づくり、地域の交流の場づくり、不登校・行き渋りの子どもや家族へのサポートという3つの活動に取り組みたい。子どもたちへの思いのある大人と子どもをつなぎたい、家庭・学校・地域で子どもたちを温かく見守ってほしいという思いで活動している。

参加者からの声

【質疑応答】

- Q 喜入マナビプロジェクトの自習室は、学校図書室や公立図書館を利用する考えはあったか。
- A 設立時はコロナ禍で公民館や図書館が閉鎖され、学校にも受け入れられず、自分たちでできることを始めた。今では公民館で自習室を開催している。断られた悔しさも原動力になった。
- Q 海岸清掃の活動について、小学校の授業内で子どもたちがより実感を得られる活動内容は？
- A 学校の先生は、環境の専門家ではなく地元の人に取り組む様子を子どもたちに伝えたいようで、子どもたちの海への思いが行動になり、自然の恵みを肌で感じてほしいのだと感じている。
- Q 不登校の子どもへのかかわり方を教えてほしい。
- A 一人の先生が30人の子ども見ており、不登校や発達特性の子もいる。ささいな声掛けが大切。サポートルームでは先生とゆっくりと話せる。学校+外部の支援機関の連携が必要。

【全体を通しての意見感想等】

- 喜入マナビプロジェクトの取組は、高校がない街で高校生が集まれるものでとてもよいと思ひ、応援したい。自習室のもくもくルームと教え合いルームというアイデアも面白い。
- 海岸清掃の取組は、実体験から始まったものであり伝わるものがある。様々な人が参加する人のつながりも参考になる。
- 子どもの居場所づくりの取組に共感した。コロナ禍では自己肯定感を持ちづらく、そうした時期を経て、不登校の子どもへの居場所づくりの取組は非常に重要だと感じた。